



気になるあいつ  
わかぎゑふ

双葉社

## 恋愛関係

今、恋愛芝居を書いている。だからというわけではないが、恋に関する芝居や映画をよく見る。しかも書いているのは大正時代の遊郭の話などで、そっち方面もよく見る。脚本を書いている時は、頭の中の相当の部分がその世界に支配されたような感覚になっている。

前回書いたのは大阪弁のコメディで、電車の話だった。あの時はやたらと電車に乗った。自分が書いているのはJRの話だったが、そんなこととは関係なくどんな線にでも乗ったものだった。東京に行くにも飛行機を使わず、新幹線にしたりして、頭の中は鉄道マニアみたいな感じにな

っていた。

本屋で電車の本を見ると「お、700系の写真載ってるやん」などと勝手につぶやいて、手にとってみたりもしていた。自分でもこの行為は完全なオタクやぞと思いつつ、止まらないのがいつものパターンだ。

電車…の時はそれでよかった。しかし、遊郭の、恋愛のという話はややこしくなる。大人の女が風俗店の前でじつと立ち止まって見ている所を想像してもらえれば、いかに迷惑かお分かりだろう。変人とは行かないまでも、営業妨害っぽいよなと自分でも反省中だ。

そんな中、アダム・クーパーというダンサーの新作「危険な関係」も東京までわざわざ見にいってしまった。ロイヤル・バレエにいた時から注目されていた人だが、日本では一昨年の男ばかりの白鳥の湖と言われた、マシュー・ボーン振り付けの「スワンレイク」の白鳥を踊ったことで一躍スターになった人だ。

顔はちょっとジム・キャリーに似たサル系だが、躍らせたなら、確実に世界トップダンサーのひとりである。そんな彼が日本で初演となる舞台、「危険な関係」を演出、振付、主演しているのである。

簡単に日本初演というが、ああいう大掛かりな舞台が日本の制作で出来るなんて、夢のような話なんである。今後世界へ持って行く舞台なのだから、これは快挙だ！ アダム・クーパーが、単に出稼ぎ的な目的で来日しているのではないという証明にもなるだろう。インタビュもちよつとさせてもらったが、ここ数年、日本の観客が自分を受け入れてくれるのを見て、長年の企画だったこの作品を作らせてもらったと言っていた。

で、「危険な関係」。どんな話かというところ、写真のおっさん、ピエール・コデルロス・ド・ラクロという人が18世紀に書いた、真理劇＋恋愛小説である。しかし、ものの見事に不倫、恋の駆引き、恋愛ゲームの星の稼ぎあいしか出てこない。「あの人と寝た」「この人を落として」「いや

いや、彼女と寝てみせる」という話である。いくら貴族かしらんけど、働くところが一回も出てこないのはいかがなものか？　と思うほどだ。

フランス革命前に書かれたというが、「そら、こんなに働らけへんかったら革命も起きるで」と思うほどである。いったい何を考えて書いたのだろうか？　ともかく恋愛ものを書いている私は、今最高に気になる男である。3世紀も前の人間なのでどうとも言えないが、肖像画の写真を携帯に貼り付けて、眺めつつ、恋について考えている。

---

【著者略歴】

わかぎあふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より故中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーII」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。

---